

令和 7 年度

入学試験問題（中 学 校）

A 日 程

国 語

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

次の【文章1】【文章2】を読んで、下の問いに答えなさい。（設問の都合上、一部変更した部分がある。）

【文章1】

もしかしたらこんな風に思われた方もいるかもしれませんが。

どんな読書も、結局のところ『豊かな経験』にはかなわないんじゃないの？本ばかり読んで、実体験が貧しい人間なんていくらでもいるよね？と。

たしかにおっしゃる通りです。自らの『経験』からこそ、私たちは多くを学び取るものです。「本ばかり読んで、実体験が貧しい人間なんていくらでもいるよね？」という言葉は、多くの読書家にダメージを与えるのに十分な言葉です。

^{注1} ジョン・デューイが、^{①注2}「1オンスの経験は1トンの理論に勝る」という有名な言葉を残しています。泳げるようになるためには、どうしたって水の中に飛び込まなければなりません。水泳の理論書だけ読んでいたって泳げるようにはならないのです。

でもその一方で、次のようにも言わなければなりません。

読書もまた、一つの『経験』であるのだと。そしてそれは、^②きわめて『豊かな経験』ともいうべきなのです。

わたしたちが直接経験できることは、残念ながらごくわずかにすぎません。自分が生まれた国や地域や置かれた環境に、わたしたちは経験も思考も多かれ少なかれ限定されて生きています。どれだけ世界中を飛び回っている人も、この世界の何もかもを見聞きすることなどできません。

でも、もし望むならば、わたしたちはそんな直接経験の世界を読書によって広げることができるのです。

水泳の理論書だけ読んでいても、たしかに泳げるようにはなりません。でもわたしたちが、もっと速く、また上手に泳ぎたいと願うなら、その理論書を読む経験は、『豊かな経験』になるにちがいないのです。

もう一点、直接経験については注意しておきたいことがあります。

豊かな直接経験は、たしかに何ものにも代えがたい貴重なものです。でもその経験こそが、時にわたしたちの視野を狭めてしまうこともあるのです。

（A）みなさんが運動部に所属していたとして、その顧問の先生だったり監督だったりが、「自分はこの練習方法で、若い時に地域大会優勝を成し遂げたんだ。だからみんなにもこの練習をみっちりやってもらう」なんて言っただけなのかもしれない？

もちろん、それがうまくいく場合もあるでしょう。（B）その練習方法は、もしかしたら、たまたまその先生に合っていただけなのかもしれません。いまの中学生や高校生には通用しないかもしれないし、そもそも、その

問一 （A）（C）に入る言葉として最も適当

なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア だから イ たとえば

ウ でも エ しかも

問二 部①と同様の意味を表すものを次から選び、

記号で答えなさい。

ア 木に縁りて魚を求む

イ 百聞は一見に如かず

ウ 虎の威を借る狐

エ 光陰矢のごとし

問三 部②のように言えるのはなぜですか。解答欄

に合うように、本文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

先生にとってだって、もったいい練習方法があったかもしれないのです。

このような考え方を、わたしは「一般化のワナ」と呼んでいます。自分が経験したことを、まるですべての人たちにも当てはまることであるかのように、過度に一般化してしまう思考のワナです。

このような「^③一般化のワナ」は、日常生活のいたるところに潜んでいます。「学校の先生なんてみんな○○だ」とか、「これだから男（女）は□□なんだ」とか、「日本人は△△だ」とかいった言い方も、文脈によっては「一般化のワナ」に思い切り陥^{おちい}ってしまった言い方です。自分がこれまでに出会ったり見聞きしたりした先生、男性（女性）、日本人の例を、すべての先生、男性（女性）、日本人に当てはまることであるかのように、過度に一般化してしまっているのですから。

読書は、そんなわたしたちの視野をうんと広げる役割を果たしてくれます。少なくとも、自分の経験を越えた世界をたくさん知ること、^④安易な一般化は慎^{つつし}めるようになるはずです。先の部活の監督も、スポーツ指導の最新研究について書かれた本を何冊か読めば、自分の経験を過度に一般化することはなくなるかもしれません。

もちろん、読書のせいで頭でっかちになって、ますます「一般化のワナ」に陥ってしまうなんてことも、ないわけではないかもしれません。

でもそれは、たぶん、むしろ読書の量や深さがまだ足りていないからなのです。

読書によっていくらか知識が豊富になると、わたしたちはついつい、物知り顔で人に何かを語りたくなってしまいます。でも、本当は、その知識は、ひどく断片的^{だんぺん}だったり、表面的なものだったりするのです。読書を積み重ねる過程で、かえってその断片的な知識を一般化してしまっていないか、わたしたちは十分自覚的である必要があるでしょう。

古代ギリシアの哲学者、ソクラテス（前469頃～前399）の哲学に、「不知の自覚」（無知の知）という有名な言葉があります。

ソクラテスの友人に、カイレフォンという青年がいました。彼はある時、デルフォイという聖域^{せいいき}にあったアポロン神殿^{しんでん}に行き、ソクラテス以上の賢者はいるかと訊^{きこ}ねました。

注^③3 神託^{しんたく}を授かる巫女^{みこ}は、こう答えました。「ソクラテス以上の賢者はいない」と。

それを聞いて驚いたソクラテスは、いや、そんなはずはないと、国中の賢者たちのもとを訪れ対話することになります。

が、その過程で彼は気がつくのです。どの賢者も、自分が何でも知っているかのように振る舞っているが、でも実際のところ、彼らは、徳とは何か、正義とは何かといった本質的な事柄について、本当は何も知らないのだ、と。（C）驚くべきことに、自分が知らないということにさえ、彼らは気づいていない。その意味では、わたしは少なくとも、自分が何も知らないということは自覚している。そうソクラテスは考えるに至ったのです。

問四 部③とはどのようなことですか。次から最も

適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分の経験は、他のものには当てはまらないかもしれないと用心し、さまざまなものを見ようとすること。

イ 自分の経験は、他のものにも当てはまると決めつけ、さまざまなものを見ようとしないこと。

ウ 自分の経験は、他のものにも当てはまると安心し、さまざまなものを見ようとすること。

エ 自分の経験は、他のものと比べることができないと考え、さまざまなものを見ようとしないこと。

問五 部④について、読書によって「安易な一般化」

が起こってしまうのは、どのような場合ですか。わかりやすく説明しなさい。

⑤ 読書は、たしかにわたしたちをグーグルマップにしてくれます。頭の中に、教養のクモの巣を張り巡らせてくれます。

でも、読書経験を積み重ねるほど、この世はまだまだ知らないことだらけ、わからないことだらけだということにも、わたしたちは否応なく気づかされるはずです。

そんな「不知の自覚」の謙虚さを、わたしたちは忘れてはならないでしょう。ソクラテスが言うように、それが賢者の条件なのだろうとわたしは思います。

【文章2】

「読書は僕たちをグーグルマップにする」

大学で、よくそんなことを学生たちに話しています。

特に若いうちは、自分がいったい何者なのか、何者になれるのか、どう生きたいのか、よくわからないものです。いわば、高層ビル群の中で道に迷って、あっちへ行ったりこっちへ行ったりを繰り返しているような状態です。

もちろん、地図のない旅は、それはそれで楽しいものだし、若い頃の特権でさえあります。

でも、それがずっと続くと、わたしたちはいつか息切れしてしまうものです。

そんな時、だまされたと思って、とにかく大量の読書経験を積んでみてほしい。そう、大学生たちに伝えていきます。そうすれば、ある時突然、自分がグーグルマップになって、^{注5} 摩天楼を真上から見下ろし、入り組んだ迷路の全体像が見えてくるから、と。そして、どの道をどう通っていけば、自分の望む地点に到達できるか、おもしろいくらいに見えてくるから、と。それはあたかも、人工衛星から地球を見下ろす、グーグルマップになったかのような光景のほずです。

【文章1】 【文章2】ともに苦野一徳『未来のきみを変える読書術』

注1 ジョン・デューイ：アメリカの哲学者・教育学者（1859～1952）。

注2 1オンス：約28グラム。「オンス」はイギリスやアメリカなどで使われている重さの単位。

注3 神託を授かる：神のお告げを受け取ること。

注4 巫女：神に仕える女性。

注5 摩天楼：天まで届くかと思われるほどの、非常に高い建物。

問六 部⑤について、筆者は【文章2】のように述べています。「読書は、わたしたちをグーグルマップ

にしてくれる」とは、人が読書によってどのようなことですか。次から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 世の中すべての情報を手に入れることができ、自分の夢をかなえることができるようになる。

イ 世の中のあらゆる所を真上から見下ろすことができ、行きたい場所に行けるようになる。

ウ 世の中のさまざまな物事を知ることができ、問題を解決する手がかりが得られるようになる。

エ 世の中のいろいろな出来事を見ることができ、知識を身につけることができるようになる。

問七 部⑥とはどのようなことですか。次から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分は何も知らないということを自覚すること。

イ 自分が何でも知っているかのように振る舞えること。

ウ 自分の頭の中に知識のクモの巣を張り巡らすこと。

エ 自分が身につけた知識を人にわかりやすく話せること。

次の文章は黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』の一節である。主人公の小学一年生トットちゃんは担任の先生からの注意を聞けずクラス中に迷惑をかけてしまったという理由で前の学校に通えなくなってしまう。困ったママは新しい学校を探し出し、トットちゃんを連れて面接に向かっている。以下はそれに続く場面である。文章を読んで下の問いに答えなさい。

学校の門が、はつきり見えるところまで来て、トットちゃんは、立ち止まった。なぜなら、この間まで行っていた学校の門は、立派なコンクリートみたいな柱で、学校の名前も、大きく書いてあった。ところが、この新しい学校の門ときたら、低い木で、しかも葉っぱが生えていた。

「地面から生えてる門ね」

と、トットちゃんはママにいった。そうして、こうつけ加えた。

「きつと、どんどん生えて、今に電信柱より高くなるわ」

たしかに、その二本の門は、根っこのある木だった。トットちゃんは、門に近づくと、いきなり顔をななめにした。なぜかといえば、門にぶらさげである学校の名前を書いた札が、風に吹かれたのか、ななめになっていたからだった。

「トモエがくえん」

トットちゃんは、顔をななめにしたまま、表札を読みあげた。そして、ママに、

「トモエって、なあに？」

と聞こうとしたときだった。トットちゃんの目の端に、夢としか思えないものが見えたのだった。トットちゃん^①は、身をかがめると、門の植えこみの、すき間に頭をつっこんで、門の中をのぞいてみた。どうしよう、見えたんだだけ！

「ママ！あれ、本当の電車？校庭に並んでるの」

それは走っていない、本当の電車が六台、教室用に、置かれてあるのだった。トットちゃんは、夢のように思った。電車の教室……。

電車の窓が、朝の光をうけて、【 A 】と光っていた。目を輝かして、のぞいているトットちゃんの、ホッペタも、光っていた。

次の瞬間、トットちゃんは、「わーい」と歓声をあげると、電車の教室のほうにむかって走り出した。そして走りながら、ママにむかって叫んだ。

「ねえ、早く、動かない電車に乗ってみよう！」

ママは、おどろいて走り出した。もとバスケットボールの選手だったママの足は、トットちゃんより速かったか

問一 …… 部 a、b の本文中での意味として適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a いさぎよく

ア 未練がましい様子で

イ 思い切りがよい様子で

ウ 嬉しそうな様子で

エ 不安そうな様子で

b おぼろげに

ア ぼんやりと イ はつきりと

ウ 明らかに エ 遠回しに

問二 空欄【 A 】～【 C 】にあてはまる語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ選択肢を選ばないものとします。

ア バタバタ イ チョキチョキ

ウ ヨレヨレ エ ガタガタ

オ キラキラ

問三 空欄【 X 】にあてはまる語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 肩 イ 目 ウ 足 エ 口

ら、トットちゃんが、あと、ちょっとでドア、というときに、スカートをつかまえてしまった。ママは、スカートのはしを、ぎゅぎゅ握ったまま、トットちゃんにいった。

「だめよ。この電車は、この学校のお教室なんだし、あなたは、まだ、この学校に入らせていただいてないんだから。もし、どうしても、この電車に乗りたかったら、これからお目にかかる校長先生とちゃんと、お話してちょうだい。そして、うまくいったら、この学校に通えるんだから。わかった？」

トットちゃんは、(いま乗れないのは、とても残念なことだ)と思ったけど、ママのいう通りにしようと決めたから、大きな声で、

「うん」

といって、それから、いそいで、つけたした。

「私、この学校、とっても気に入ったわ」

ママは、トットちゃんが気に入ったかどうかより、校長先生が、トットちゃんを気に入ってくださるかどうかが問題なのよ、といたい気がしたけど、とにかく、トットちゃんのスカートから手を離し、手をつないで校長室のほうに歩き出した。

どの電車も静かで、ちょっと前に、一時間目の授業が始まったようだった。あまり広くない校庭のまわりには、塀のかわりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇には、赤や黄色の花がいっぱい咲いていた。

校長室は、電車ではなく、ちようど、門から正面に見える扇型に広がった七段くらいある石の階段を上った、その右手にあった。

トットちゃんは、ママの手をふりきると、階段を駆け上って行っただが、急に止まって振りむいた。だから、うしろから行っただママは、もう少しで、トットちゃんと正面衝突するところだった。

③「どうしたの？」

ママは、トットちゃんの気がかわったのかと思って、いそいで聞いた。トットちゃんは、ちようど階段の一番上に立った形だったけど、まじめな顔をして、小声でママに聞いた。

「ねえ、これから逢いに行く人って、駅の人なんじゃないの？」

ママは、かなり辛抱づよい人間だったから……というか、面白がりやだったから、やはり小声になって、トットちゃんに顔をつけて、聞いた。

「どうして？」

トットちゃんは、ますます声をひそめていった。

「だってさ、校長先生って、ママだったけど、こんなに電車、いっぱい持ってるんだから、本当は、駅の人なんじゃないの？」

問四 部①のように「トットちゃん」がふるまった

のはなぜですか。理由の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 学校の敷地内で電車が走っているのを見て興奮したから。

イ 門の中に見えた電車は動いていなくてがっかりしたから。

ウ 門が前の学校より小さくてがっかりしたから。

エ 門の中に本物の電車が並んでいるのをみつけて興奮したから。

問五 部②の「ママ」についての説明として最も適

当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア トットちゃんの機嫌を損ねないように必死でついでいこうとしている。

イ トットちゃんが学校に迷惑をかけないように必死で止めようとしている。

ウ トットちゃんが上機嫌なので自分も嬉しくなって後を追いかけている。

エ トットちゃんに元バスケットボール選手の力を見せつけようとしている。

問六 部③のように「ママ」が発言したのはなぜで

すか、説明しなさい。

たしかに、電車の払い下げを校舎こうしゃにしている学校なんて珍しいから、トットちゃんの疑問も、もつとものこと、とママも思ったけど、この際、説明してるヒマはないので、こういった。

「じゃ、あなた校長先生うかがに伺うかがつてごらんさい、自分で、それと、あなたのパパのことを考えてみて？ パパはヴァイオリンを弾ひく人で、いくつかヴァイオリンを持つてるけど、ヴァイオリン屋さんじゃないでしょう？ そういう人もいるのよ」

トットちゃんは、「そうか」というと、ママと手をつないだ。

トットちゃんとママが入っていくと、部屋の中にいた男の人が椅子いすから立ちあがった。

その人は、頭の毛が薄うすくなっている、前のほうの歯が抜ぬけていて、顔の血色けっしょくがよく、背はあまり高くないけど、肩かたや腕が、がっちりしていて、

【 B 】の黒注1の三つ揃そろいを、キチンと着ていた。

トットちゃんは、いそいそでおじぎをしてから、元気よく聞いた。

「校長先生か、駅の人か、どっち？」

ママが、あわてて説明しよう、とする前に、その人は、笑いながら答えた。

「校長先生だよ」

トットちゃんは、とつてもうれしそうにいった。

「よかった。じゃ、おねがい。私、この学校に入りたいの」

校長先生は、椅子をトットちゃんにすすめると、ママのほうを向いていった。

「じゃ、僕ぼくは、これからトットちゃんと話がありますから、もう、お帰りくださって結構けつこうです」

ほんのちよつとの間、トットちゃんは、少し心細い気がしたけど、なんとなく、（この校長先生とならいいや）と思った。ママは、いさぎよく先生にいった。

「じゃ、よろしく、お願いします」

そして、ドアを開けて出ていった。

校長先生は、トットちゃんの前に椅子をひっぱって来て、とても近い位置に、むかい合わせに腰こしをかけると、こういった。

「さあ、なんでも、先生に話してごらん。話したいこと、全部」

「話したいこと!？」

（なにか聞かれて、お返事するのかな？）と思っていたトットちゃんは、「なんでも話していい」と聞いて、ものすごくうれしくなって、すぐ話し始めた。順序じゅんじょも、話し方も少しグチャグチャだったけど、一生懸命いっしょうけんめいに話した。

いま乗って来た電車が速かったこと。

駅の改札口のおじさんに、お願いしたけど、切符をくれなかったこと。

前に行った学校の受持ちの女の先生は、顔がきれいだったということ。

その学校には、つばめの巣があること。

家には、ロッキーという茶色の犬がいて、お手」とごめんくださいませ」と、ごはんのあとで、満足、満足が出来ること。

幼稚園のとき、ハサミを口の中に入れて、「 C 」やると、「舌を切ります」と先生が怒ったけど、何回もやっちゃったということ。

涙が出てきたときは、いつまでも、ズルズルやってると、ママに叱られるから、なるべく早くかむこと。

パパは海で泳ぐのが上手で、飛び込みだって出来ること。

こういったことを、次から次と、トットちゃんは話した。先生は、笑ったり、うなずいたり、「それから？」とかいったりしてくださったから、うれしくて、トットちゃんは、いつまでも話した。でも、とうとう、話が無くなった。トットちゃんが、「 X 」をつぐんで考えていると、先生はいった。

「もう、ないかい？」

トットちゃんは、これでおしまいになってしまうのは、残念だと思った。

せっかく、話を、いっぱい聞いてもらう、いいチャンスなのに。

(なにか、話は、ないかなあ……)

頭の中が、いそがしく動いた。と思ったら、「よかった!」。話がみつかった。

それは、その日、トットちゃんが着てる洋服のことだった。

(中略)

それをいつてしまったら、どう考えてみても、本当に話は、もう無くなった。トットちゃんは(少し悲しい)と思った。トットちゃんが、そう思ったとき、先生が立ち上がった。そして、トットちゃんの頭に、大きくて暖かい手を置くと、

「じゃ、これで、君は、この学校の生徒だよ」

そうだった。……そのとき、トットちゃんは、なんだか、生まれて初めて、本当に好きな人に逢ったような気がした。だって、生まれてから今日まで、こんな長い時間、自分の話を聞いてくれた人は、いなかったんだもの。そして、その長い時間のあいだ、一度だって、あくびをしたり、退屈そうにしないで、トットちゃんが話してるのと同じように、身をのり出して、一生懸命、聞いてくれたんだもの。

トットちゃんは、このとき、まだ時計が読めなかったんだけど、それでも長い時間、と思っただけなら、まだ読めたら、ビックリしたに違いない、そして、もっと先生に感謝したに違いない。というのは、トットちゃん

とママが学校に着いたのが八時で、校長室で全部の話が終わって、トットちゃんが、この学校の生徒になった、と決まったとき、先生が懐中時計注2を見て、「ああ、お弁当の時間だな」といったから、つまり、たっぷり四時間、先生は、トットちゃんの話聞いてくれたことになるのだった。

あとにも先にも、トットちゃんの話で、こんなにちゃんと聞いてくれた大人は、いなかった。

それにしても、まだ小学校一年生になったばかりのトットちゃんが、四時間も、ひとりでしゃべるぶんの話があったことは、ママや、前の学校の先生が聞いたら、きつと、びっくりするに違いないことだった。

このとき、トットちゃんは、まだ退学のこととはもちろん、まわりの大人が、手こずってること、気がついていなかったし、もともと性格も陽気で、忘れっぽいタチだったから、無邪気むじゃきに見えた。でも、トットちゃんの中のとこかに、なんとなく、疎外感そがいかんのような、他の子供と違って、ひとりだけ、ちょっと、冷たい目で見られているようなものを、おぼろげbには感じていた。それが校長先生bといると、安心して、暖かくて、気持ちよかった。

④（この人となら、ずーつと一緒にいてもいい）

これが、校長先生、小林宗作氏こばやしむさくに、初めて逢った日、トットちゃんが感じた、感想だった。そして、有難いありがたことに、校長先生も、トットちゃんと、同じ感想を、そのとき、持っていたのだった。

【黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』】

注1 三つ揃い——上着・チョッキ・ズボンの三つがセットになったスーツ。

注2 懐中時計——衣服のポケットや懐ふとこなどに入れて持ち歩く、小型の時計。

問七 部④のように「トットちゃん」が思ったのは

なぜですか、説明しなさい。

部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① つらいことがあつて号泣した。
- ② あの人が率いるチームは必ず勝つ。
- ③ 得体のしれない不気味な物体。
- ④ 学校に遅刻した訳を説明する。
- ⑤ 各国首脳が集まって会議を行う。
- ⑥ タイサをつけて勝利した。
- ⑦ ぜひ力をかしてください。
- ⑧ 教室はテキオンに保たれている。
- ⑨ スジミチを立てて説明した。
- ⑩ ボールをジュウジザイにあやつる。